

ビジネス継続のための ディザスタリカバリ (災害復旧対策) — まずは自社の現状分析と弱点把握を！ —

アブストラクト

1. なぜ進まない災害対策

災害は確かに増えている。地震、風水害といった自然災害、米国 9.11 同時多発テロをはじめとした人的災害、ウイルス感染、情報漏洩といったシステム災害など、近年、その種類は多様化してきた。事業の基盤としての役割を担うコンピュータシステムにとって、災害は大きな脅威であり、被害規模によっては企業存続をも左右しかねない。災害対策とは別に各企業には、CSR (社会的責任)、コーポレートガバナンスの観点からの要求も加わり、具体的な取り組みを求められている。対策の策定に向け、行政等からは各種のガイドラインが発行されているが、各社は「どこから手を付けたらよいかわからない」という現実の課題に直面している。また、「災害対策はコストありき」との固定観念が拭えないことも着手を遅らせている要因であろう。多くの企業では、ビジネス継続へ向けた災害対策の必要性を認識するものの、その手掛かり、出発点を模索しているのが現状である。

2. 災害対策の鍵発見

事業の基盤を揺るがす災害に対して、企業は何かしらの対策を講じておく必要がある。「対策」と言えば、とかく大掛かりなコストがかかると思いがちである。しかし、「今の状態＝現状＝弱点」を知らずして「策」など立てられるはずがない。また、今の災害対策状況がそもそも整理、把握されていないのがまさに現状ではないだろうか。

私達は、「現状把握／分析」が鍵であると確信し、対策着手に向け漠然としている企業に対して具体的な「始めの一步」を与えるべく、以下のアプローチで研究を進めた。

- (1) 参加メンバー各社の現状の対策状況を整理し把握した。
- (2) 業務部門の要求と現状システムの対策ギャップに気づき、可視化を試みた。
- (3) 取っ付き易く使いやすい、自社の弱点まで把握できる手法を考案した。

3. 現状分析による弱点の「可視化」

3.1 鍵の具現化

「どこからどのように手を付けてよいか」をポイントと捉え、現状分析から計画の糸口を掴むまでを研究の対象範囲とした。現状分析手法として、次の7つのプロセスを考案し、各プロセスに対して、災害対策現状分析ツールを作成した。

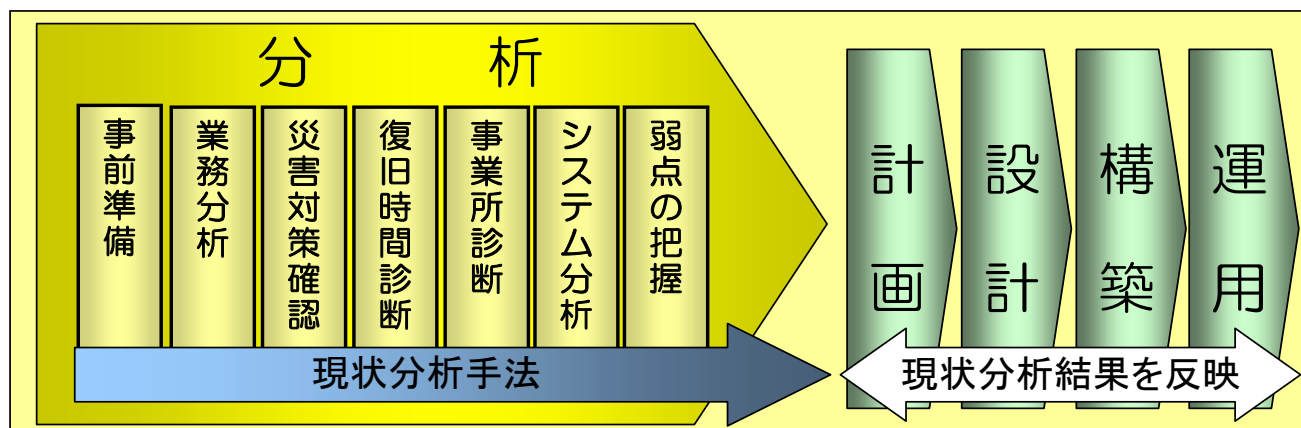


図1 災害対策構築プロセス

(1) 事前準備

前作業として必要となる企業の組織図や業務・システムの一覧など、既存の情報を活用し、情報の収集、整理／把握する。また、脅威となる災害を想定する。

(2) 業務分析

災害が発生した時に、業務部門が要求する目標復旧時間について整理し把握する。また、各業務で使用しているシステムを洗い出す。

(3) 災害対策確認

全体管理者、施設管理者、システム管理者から現状の事業所（施設等）やシステムの災害対策状況、事業継続方針の内容を確認する。

(4) 復旧時間診断

災害によるシステム障害が発生した時、どの程度の時間で復旧できるか算出する。なお、復旧時には、災害発生からバックアップデータの復旧までの作業が含まれる。

(5) 事業所診断

「(3) 災害対策確認」で確認した各事業所の災害対策状況を整理する。

(6) システム分析

現状システムの復旧時間を把握する。また、関連するシステムについて整理し明らかにする。

(7) 弱点の把握

業務が要求する復旧時間と現状システムの復旧時間を比較し、差異（ギャップ）を弱点として可視化する。また、レーダーチャートを使用して、自社と業界標準との災害対策レベルを比較することにより、自社対策の強みや弱点等の全体バランスを把握する事が可能となる。

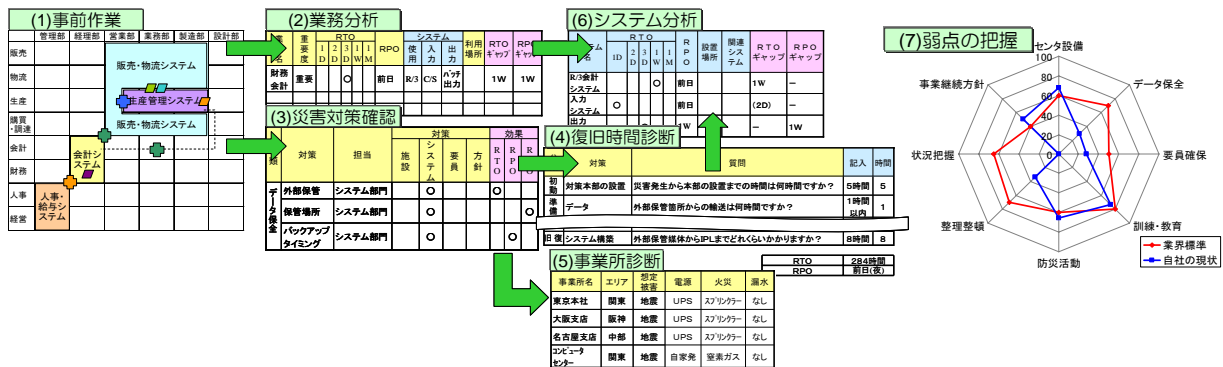


図2 現状分析ツール群

3.2 災害対策現状分析ツールの有効性についての検証

現状分析の手法及び災害対策現状分析ツールの実証のために、仮想会社を想定した有効性の検証を行った。結果、復旧時間の差異による災害対策の弱点を可視化でき、それに対する災害対策を導きだせる事を確認することができた。一方で、復旧時間の差異からは見つけられない災害対策の課題についても、ツールを使用する事で抽出する事ができ、災害対策現状分析ツールの有効性が実証できた。

4. 評価と提言

私達の災害対策現状分析ツールは、仮想会社でのシミュレーションを経て評価、検証を加えブラッシュアップされた。分析の手法を具体的に分かりやすくマニュアル化した「災害対策現状分析ガイドライン」の作成、提示により、各社での有用性を増すことであろう。

災害対策と言えば、各社各様のIT投資の優先順位や経営者の意思決定など、とかくハードルが高い課題と捉えられているが、私達は「地に足が着いた」「今から直ぐにとりかかれる」観点で研究を進め、具体的な成果物を作成することができた。現状分析は災害対策全体像の中での一部に過ぎないが、これが最も重要であり、是非各社で実践し「弱み」を「可視化」していただきたい。さて、今回私達は、災害対策の「スタートライン」から走り出すことができた。今後は、現状をしっかりと見据えた上で、ビジネス継続に向けた対策について「計画」「設計」「構築」「運用」という次なるステップへ移行していただきたい。さらに、全社的活動のもと組織的な取り組みや、見直し、維持といった持久力のあるPDCAサイクルを忘れてはならない。 一備えあれば憂いなし